

### 「草の根」から丹精する「緑」



▲ 「きれいねえ」。近くを通った人の声に笑顔を見せる山本さん（高松市内で）

これはグミの木。初夏にはたくさんの実がなるの。このユスラウメは昨年、病気にかかって収穫できなかったけれど、なんとか無事に花を咲かせてくれた。これはイチジクで……」

高松市郊外にある小さな公園。山本文子（65歳・讃高分教会ようぼく）は、花々や果樹の一つひとつを、優しいまなざしで眺めながら話す。

「お年寄りや子供たち、年齢を問わずたくさんの人が集まる場になればと思って。それがすべての始まり」

13年前、修養科を修了してすぐに「自分にできるひのきしんを」と、園内の公衆トイレの掃除を始めた。

しばらく経ったころ、敷地内に植えられていた桜5本のうち4本が枯れた。華やいだ雰囲気のある公園は、一転して閑散となった。

明るい公園を取り戻そう——。管理者の承諾を得て、桜があった場所に次々と木を植えた。キイチゴ、ビワ、ザクロ、サクランボ……。木の根元や園の門脇には、スイセンやキクなどの花々も。

「農家に生まれ、幼いころから土に親しんできたから。そういえば、植えている木の実の子供のとき、おやつ代わりに食べたものばかりね」

これと並行して、長らく雑草や雑木が茂っていた空き地の活用にも着手。果樹に加えてサトウキビやコスモス、チューリップなどで彩った。

たわわに実った果実や花々は、摘み取って所属教会や知人へ届けるほか、近隣の人には「お好きなときに、お好きなだけ摘んでいって」と声をかける。

「時には、子供たちが木の実をばらまいて遊んだり、苗を引っこ抜いたりしてしまうこともあるけれど……。いまではそれも、子供が元気な証しだと思っています」

時折、公園の利用者や通りすがりの人から「きれいですね」などと声をかけられる。近くの幼稚園児らが、整列して「いつもきれいにしてくれて、ありがとうございます」と言ってくれたことも。

植物を丹精する中で、あらためて気づいたことがある。「『まいたるたねはみなはへる』と聞かせていただく。どんな種でも、まかないことには生えない。何においても、まずは行動することが大切」

一昨年秋に植えたフジが、柱を伝って2年ほど蔓を伸ばし、最近、枝先につぼみを付けた。

「見た人がほっと安らげるような藤棚になる日が楽しみ」

1本だけ枯れずに残った桜は、山本の「草の根」の営みを見守るように、毎年、満開の花を咲かせている。

（文中、敬称略）